

紀

要

第 12 号

1999. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き

## — 地域の検討 4. 湖西北部地域 —

小 島 孝 修

### 1. はじめに

われわれが研究対象としている近江という地域は、日本列島の中心にあつて、東西世界の境界の一つとして機能してきた地域である。筆者の研究目的の一つは、この地における縄文時代から弥生時代前期にかけての展開過程を検討することにより、近江という地域の地理的特性を解明することにある。そしてもう一つの目的は、歴史学としての考古学を考えたときに、そういった成果を応用して我々の現在位置する立場を見定め、さらに今後進むべき方向性を模索していくことにある。

われわれが行っているこの一連の研究は、近江各地域の縄文時代および弥生時代前期の遺跡を俯瞰する作業を行い、今後に向けての検討課題を抽出していくことに目的を置いている。これらの作業を重ねた後、近江というより大きな地域へのアプローチができると考えている。

本稿で取り扱う湖西北部地域とは、具体的には高島郡を指す。当初は湖西地域として湖西南部地域の犬上郡西部および滋賀郡志賀町もふくめて検討する予定であった。しかし、地形的に北部地域と南部地域は連続性がないこと、また南部地域は湖南地域と地理的に近接しているその関連性も検討すべきであることから、今後あらためて検討することとした。

以下に行う作業の手順および前提条件については、瀬口眞司による「地域の検討 3. 湖南地域」(本誌 1~18ページ)と基本的には同じである。ただし地形区分については、2万5千分の1土地条件図の「北小松」および「竹生島」(国土地理院発行)を参考に、山地・段丘(中位段丘・下位段丘・低位段丘)・扇状地・氾濫平野・湖底の5種類7区分を設定した。従来の検討では湖岸から2kmを「湖岸近接地」として設定していたが、今回検討対象としている湖西北部地域は、湖東・湖南地域との立地地形の相違から「湖岸近接地」を設定する必要がないと判断し、先述の区分のみを設定した。また時期設定に関しては、

「土偶シンポジウム奈良大会」(1997年)で用いられたものを若干修正して用いることにする<sup>11)</sup>。

### 2. 地理的条件

湖西北部地域は、マキノ町・今津町・新旭町・安曇川町・高島町・朽木村の、高島郡5町1村で構成される。北部は野坂山地によって福井県敦賀市・三方郡・遠敷郡と接し、西部は丹波高地で京都府北桑田郡・京都市と接し、東部は琵琶湖に面している。南部は安曇川・鴨川が形成した平野部が比良山地によってさえぎられ、湖岸にせり出した山地のふもとにへばりつくようにして、湖西南部地域への交通路である国道161号線が通っている。面積は約510km<sup>2</sup>と広いが、山地が広い面積を占めている。また、もとは一つであったと考えられている饗庭野と泰山寺野の洪積台地が、今津町から新旭町・安曇川町にかけて位置している。東部には平野部がみられるが、安曇川が形成した沖積平野以外はそれほど開けてはいない。当地域を流れる主要河川は流路の短いものが大半であるが、続いて、北からそれらの形成してきた地形を概観していき<sup>12)</sup>たい。

知内川はマキノ町の中心を貫通する河川で、野坂山地に源を発して南流、小荒路付近より流路を西方に転じたのち、落合の西で再び南流して琵琶湖にそそぐ。上流部には谷状地形が形成され、国道161号が知内川に添って敦賀市へ続く。中流域には西部の山地より東流する諸支流によって牧野・石庭の扇状地が発達しており、扇端の湧水地帯には諸集落が立地している。

百瀬川はマキノ町の南部を流れる河川で、大谷山付近に水源を発し、野坂山地の断層崖を激しく侵食して、ほほなだらかな土石流扇状地を形成したのち琵琶湖にそそぐ。県内有数の荒廢河川であつて砂礫の生産が激しく、下流部では典型的な天井川となっている。扇中央部では礫や砂が多く堆積しているため、伏流となつて各所で湧水がみられ、扇端部はしばし

ば水害や土砂災害に見舞われ（暴れん坊黒川）、その跡が扇状地上に地名の由来となった魚鱗状の微地形として残されている。上流部は後述の石田川を争奪しており、このことで水量が増して侵食速度を速め、大量の土砂流出の要因となっている。

石田川は今津町の北端と福井県三方町との境にある三重嶽の東方に水源を発し、武奈ヶ岳の東側の古生層地帯を激しく蛇行しながら南流し角川にいたり、保坂の南で途中谷を合わせたのち国道303号線にそって東流し箇生において平地に出る。さらに梅ヶ原、大床をへて浜分で琵琶湖にそそぐ。下流域は扇状地・性低地を形成しており、穀倉地帯となっている。

安曇川は花折峠西の京都市左京区大見町の山地から水源を発し、比良山地と丹波高原との間の花折断層を北流し、朽木村市場から東流して、湖岸に広い三角州を形成する。上流は、南は葛川谷、北は朽木谷とよばれる典型的な峡谷となっているが、洛北の高野川の谷に通じており、古くより京都から若狭へと抜ける西近江路の脇街道として、北陸への重要な交通路であった。下流は見事な三角州を形成して古くから水田が開けていたが、大量の砂礫の堆積により河床も高いため、井ノ口付近から河口にかけては天井川となっている。また伏流水として地下に浸透し、「新庄の日やけ」と呼ばれる。洪水や流路の変化が激しく、網目状に流れた旧河道間の微高地に集落が立地している。三角州部分は低湿地が多く、湖岸から約1.5kmの範囲は地下水位も高い。

鴨川は高島町を南西から北東へと貫流し、琵琶湖に流入する。武奈ヶ岳北方に源を発し、八雲原北端部付近から険しい峡谷となり、八池谷を通り、比良山地の支谷を集め、高島町武曾で平地に出る。そのあと八田川を左岸に合流して、安曇川町下小川で琵琶湖にそそぐ。北岸の一部が古生層であるほか、流域の大部分は花崗岩地帯からなり、土砂の流出がいちじるしく、下流部では流路変更が頻発して天井川となっている。

以上の各河川の特徴をみてみると、当地域の河川には二種類あることがわかる。百瀬川・安曇川・鴨川は、上流部からの土砂の流出が激しく、下流部で形成される扇状地は多くが砂礫によるため伏流し、天井川を形成している部分が多い性質をもつ。一方

の知内川・石田川には、そういった特徴はみられない。

河川の特徴に関連してここでもう一つ指摘しておきたいのは、外界との交通経路についてである。北陸方面には、知内川が上流部で越前・敦賀に通じているし（西近江街道）、石田川は若狭・小浜に通じている（若狭街道）。一方内陸へ目をむけると、安曇川は朽木谷・葛川谷を通じて山城北部と途中越えて通じており、これが若狭街道につながって、前述のように鯖街道として古くから重要な経路として使われていた。さらにこれらの河川沿いの街道が、琵琶湖における湖上交通につながっていたと考えられる。平野部は湖東・湖南地域に比べ狭いものの、北陸方面へ抜ける重要な交通の要衝として、湖西北部地域はとらえることができる。

### 3. 事象の整理

#### A. 各地区の内容とその消長

高島地域の縄文遺跡は、管見の限りで30遺跡（マキノ町5遺跡、今津町16遺跡、新旭町5遺跡、安曇川町1遺跡、高島町3遺跡）を数えた。6町村のうち、朽木村においては縄文遺跡は発見されていない。これらを、地理的なまとまりにより地区構成を行った。また前述の土地条件図を用いて、立地地形の検討を行った。その結果、以下の6地区に分けることができた（図1）。

また表1は各遺跡の概要を、表2は各遺跡の消長をまとめたものである。縄文晩期後葉の土器と弥生前期前半の土器は、時期的にはほぼ併行するものとして取り扱っている。

#### 1 地区：知内川下流域（1～5：山中・上開田遺跡・辻遺跡・蛭口遺跡・仏性寺遺跡）

マキノ町に位置する5遺跡からなる本地区の遺跡は、扇状地や氾濫原に立地する。活動痕跡の初源は、上開田遺跡(2)と辻遺跡(3)で発見されている縄文中期前葉の船元式土器である。その後は上開田遺跡と仏性寺遺跡(5)で、縄文後期の資料がまとめて出土している。上開田遺跡からは遺構は発見されていないが、二次堆積の包含層から縄文後期中葉を主体とする多くの遺物が見つかった。仏性寺遺跡からは縄文後期前葉の中津式期から北白川上層式期

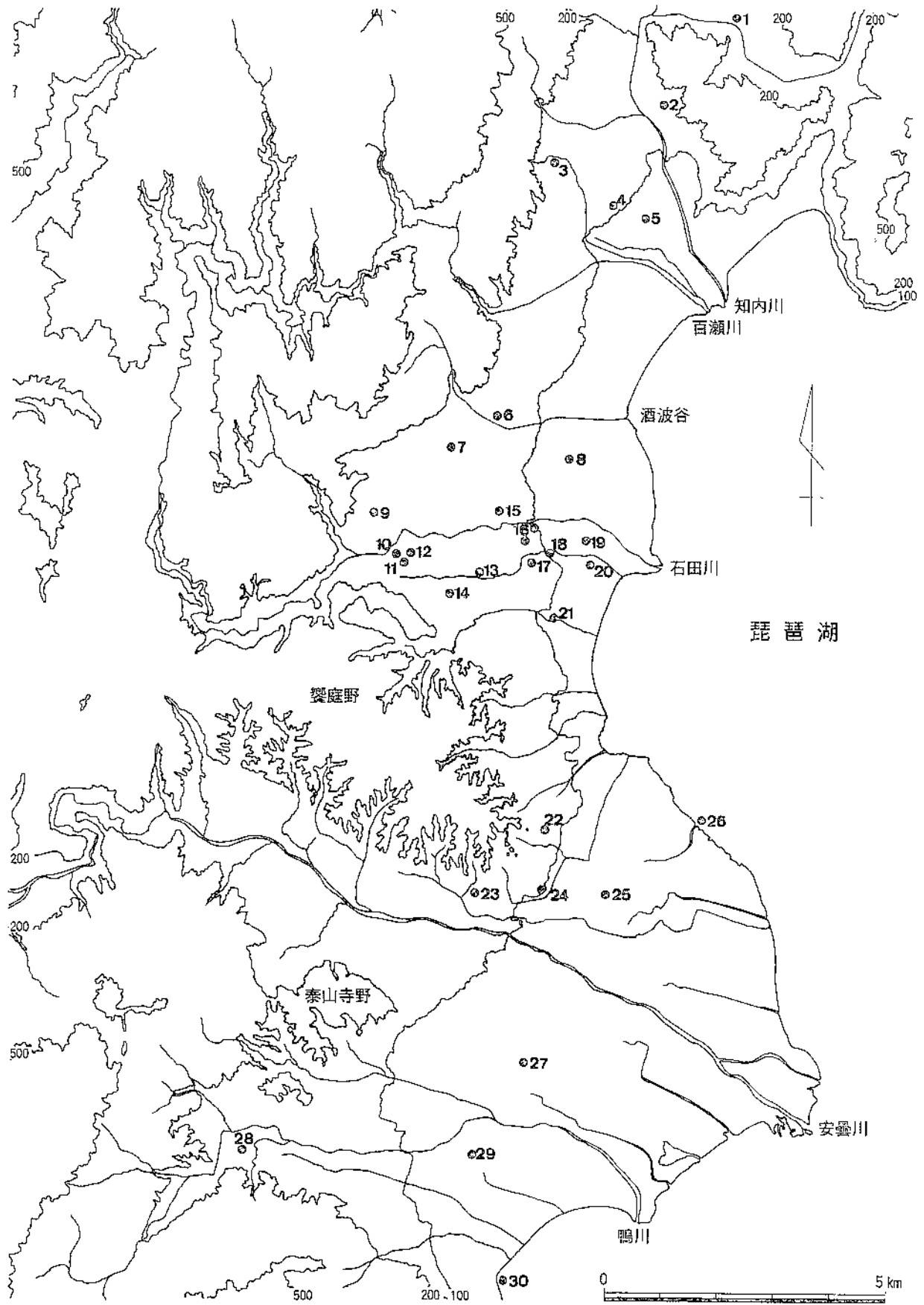


図1 湖西北部地域における縄文遺跡の分布 (S = 1 : 100000)  
 等高線は、100m・200m・500mを表示

No.	遺跡名	所在地	立地	地区	概要	文献
1	山中	マキノ町山中	扇状	1	木内石亭の収蔵品に山中採集の独鈷石がある(現物不明)。	26
2	上開田	マキノ町上開田	扇状・氾濫	1	昭和54年度の調査で、二次堆積層から中期船元式・後期中津式〜乗寺式土器・石器などが出土。	2
3	辻	マキノ町辻	扇状	1	昭和53年度の道路工事で、中期船元式土器1点を採集。	26
4	蛭口	マキノ町蛭口	扇状	1	マキノ中学校運動場建設で、縄文土器が出土(詳細不明)。	21
5	仏性寺	マキノ町蛭口	氾濫	1	昭和53年度の調査で、黒灰色粘土層から後期福田KⅡ式・北白川上層式土器および土偶・石器が大量に出土。	1
6	酒波東	今津町酒波	低段	2A	昭和58年度の調査で、酒波東3号墳石室から凹み石が出土。	8
7	日置前	今津町酒波・日置前	下段	2A	昭和57年度の調査で、打製石斧が出土。平成6年度の調査で、晩期土器を伴う落とし穴状土坑10数基を検出。このほか、サヌカイト製の尖頭器や石斧などが出土。	7, 14, 20
8	北仰西海道	今津町北仰	氾濫	2A	昭和58年度は、溝や包含層から後期中・後葉の遺物が出土。昭和59年度の一次調査では土器棺墓1基を検出、包含層にはまとまった後〜晩期の遺物があり、突帯文土器と弥生前期新段階の土器が共伴。二次調査では晩期中・後葉の土器棺墓35基とほぼ同数の土壌墓が検出され、ヒスイ管玉や石棒などが出土。昭和60年度は、晩期中・後葉の土器棺墓67基、後期中葉〜晩期中葉の土壌墓58基を検出。遺物には北陸系土器もある。昭和61年度は同時期の土器棺墓90基、後期後葉〜晩期後葉の土壌墓250基以上などを検出。昭和63年度は、同時期の土器棺墓6基などが検出され、石棒や土偶が出土。	4, 9, 10, 11, 13
9	山本	今津町梅原	下段	2B	(詳細不明)	21
10	弘部野蘭生中芝原	今津町蘭生	下段	2B	昭和62年度の調査で、晩期中葉滋賀里Ⅲ式の土器棺墓2基や土壌墓40基以上、柱穴などを検出。	12
11	弘部野蘭生高池	今津町蘭生	下段	2B	昭和62年度の調査で、晩期突帯文の土器棺墓4基や土坑・ピットなどを検出。平成10年度の調査では、土坑などから晩期突帯文・弥生前期後半の遺物が出土(未公表)。	12
12	弘部野蘭生中ノ町	今津町蘭生	下段	2B	昭和56年度の調査で、晩期中葉の柱穴・集石遺構などを検出。昭和57年度の調査では、土坑・柱穴などのほか包含層からも後期後葉〜晩期前葉の土器や石棒を含む石器が大量に出土。昭和62年度の調査で、晩期中葉の土器棺墓3基および配石遺構3基・土坑・柱穴を検出。大量の土器・石器が出土。北陸・東北系の土器もある。	6, 12, 27
13	弘部野南海道	今津町下弘部ほか	下段	2B	(詳細不明)	21
14	上弘部	今津町上弘部	中段	2B	以前に縄文土器が出土(詳細不明)。	21
15	心妙寺	今津町福岡・岸脇	下段	2C	昭和54年度の調査で、土坑SK2から早期押型文土器1点が、SK9から石鏃2点が出土。また落とし穴状遺構を3基検出。	6, 16
16	弘川B	今津町弘川	下段・低段	2C	昭和54年度の調査で、晩期後葉突帯文の土器棺墓1基を検出。また自然流路埋土から中期後葉北白川C式土器および石器が大量に出土。昭和57年度の調査では、サヌカイト製石鏃と黒曜石チップが出土。弥生前期土器も出土。	3, 4, 5
17	弘川A	今津町弘川	下段	2C	昭和51・52年度の調査で、早期押型文土器と後期の土器・チャート製の石器が出土。弥生前期土器も出土。	24
18	弘川下野	今津町弘川	低段	2C	(詳細不明)	15
19	弘川友定	今津町弘川	氾濫	2C	平成2年度の試掘調査で、石器が出土。平成3年度の調査でチャート・サヌカイト製の石器が出土。	16, 19
20	弘川武末	今津町弘川	氾濫	2C	昭和63年度の試掘調査で風倒木痕から押型文土器が出土。	13
21	大供	今津町大供・今津	下段	2C	昭和57年度の調査で、包含層から中期土器の底部と石器が出土。昭和58年度の調査でも縄文時代の遺物が出土している(詳細不明)。	7, 8
22	稻荷山山頂	新旭町饗庭	山地	3	分布調査で、石鏃1点を採集。	17
23	下平	新旭町安井川	中段	3	昭和46年度の分布調査で、チャート製の石鏃3点とチャート・サヌカイトの剥片を採集。昭和55年度の調査で黒曜石製の石鏃を採集。	17
24	犬鳥場	新旭町安井川	下段	3	昭和45年度の分布調査で縄文土器やサヌカイト製石鏃・石鏃などを採集。昭和46年度の調査でも縄文土器が出土。	17
25	堀川	新旭町旭	扇状	3	昭和49年度の調査で、石鏃3点が出土。	17
26	針江浜	新旭町針江	湖底	3	昭和63〜平成元年度の調査で、弥生前期新段階の遺構面から独鈷石が出土。	22
27	南市東	安曇川町末広	扇状	4	昭和54年度の調査で、地山衣層から縄文土器が出土。	25
28	中ノ坊	高島町高島	下段	4	昭和51年度の立会調査で、サヌカイト製の石匙が出土。	18
29	鴨	高島町鴨	氾濫	4	昭和54年度の調査で、古墳の盛土から早期押型文土器と後期中津式・北白川上層式土器および石器が出土。このほか、弥生前期中段階の土器も出土している。	23
30	大溝湖底	高島町大溝	湖底	4	昭和63年度の調査で2次堆積層から晩期・弥生土器が出土。	28

凡例：「立地」は山地および湖底以外は以下のように省略した。

中位段丘：中段 下位段丘：下段 低位段丘：低段 扇状地：扇状 氾濫平野：氾濫

表1 湖西北部地域の概要

No.	遺跡名	地区	旧石器 ・有舌	早期		前期		中期		後期		晩期	縄文・後半	弥生	特記事項	
				前	後	前	後	前	後	前	中	前	後	前		後
1	山中	1														
2	上開田	1													独鈷石	
3	辻	1						○		○	○					
4	蛭口	1						○								
5	仏性寺	1													土偶(後期前葉)	
6	酒波東	2A														
7	日置前	2A	○													
8	北仰西海道	2A								○	○	◎	◎	◎	○	石棒、石刀、石冠、土偶、 翡翠管玉、北陸系土器
9	山本	2B														
10	弘部野蘭生中芝原	2B										○				
11	弘部野蘭生蔦池	2B											○			
12	弘部野蘭生中ノ町	2B								○	◎	○			石棒、東北・北陸系土器	
13	弘部野蘭生南海道	2B														
14	上弘部	2B														
15	心妙寺	2C		○												
16	弘川B	2C						○					○	○	黒曜石	
17	弘川A	2C		○										○		
18	弘川下野	2C														
19	弘川友定	2C														
20	弘川武末	2C		○												
21	大供	2C													○	
22	稲荷山山頂	3														
23	下平	3													黒曜石	
24	犬馬場	3														
25	堀川	3														
26	針江浜	3										?	◎	○	独鈷石	
27	南市東	4												○		
28	中ノ坊	4														
29	鵜	4		○						○	○		◎			
30	大溝湖底	4											○			

凡例：○は活動痕跡がみられる時期。◎はそのうち希少性のある物資や祭祀装置の存在（時期が明確なものに限る）などを、◎は弥生前期前半の土器の存在を示す。また矢印は出土遺物の詳細な時期が不明であることを意味する。

表2 遺跡の消長

にかけての遺物が大量に出土しており、それらのうち分銅形土偶や関東系の堀之内Ⅱ式土器が注目される。そのほかには、採集された独鈷石が木内石亭の収集品にみられたという山中(1)や、時期は不明だが縄文土器が出土した蛭口遺跡(4)があるが、当地区は縄文晩期以降の痕跡は確認されていない。

#### 2地区：石田川流域

今津町に所在する15遺跡を、空間的なまとまりから3つの小地区に分けて検討する。

#### 2A地区：酒波谷流域（6～8：酒波東遺跡・日置前遺跡・北仰西海道遺跡）

石田川北部の酒波谷を挟んで立地する3遺跡で、立地する地形区分は低位段丘・下位段丘・氾濫平野と統一性はない。日置前遺跡(7)から旧石器が出土しているが、活動痕跡の初源は北仰西海道遺跡(8)

で出土している縄文後期中葉の遺物である。この北仰西海道遺跡からは、縄文後期から晩期にかけての人墓域が検出されている。縄文晩期中葉・後葉の土器棺墓群が約100基と、土塚墓と考えられる縄文後期中葉から縄文晩期後葉にかけての土坑が同じく約100基発見されており、これらなどから翡翠の管玉や石棒・土偶（縄文晩期中葉）なども出土している。そのほかには、日置前遺跡で縄文晩期の落とし穴状土坑10数基が検出されているほか、酒波東遺跡(6)で古墳石室の埋土から凹み石が出土した例が挙げられる。弥生前期後半の土器は北仰西海道遺跡で出土している。

#### 2B地区：石田川中流域（9～13：山本遺跡・弘部野蘭生中芝原遺跡・弘部野蘭生蔦池遺跡・弘部野蘭生中ノ町遺跡・弘部野南海道遺跡・上弘部

## 部遺跡)

弘部野に所在する5遺跡で、全ての遺跡が下位段丘および中位段丘に立地する。活動痕跡の初源は弘部野蘭生中ノ町遺跡(12)でみられる縄文後期後葉(宮滝式)の遺物である。このうち比較的近接して所在する弘部野蘭生中芝原遺跡(10)・弘部野蘭生薦池遺跡(11)・弘部野蘭生中ノ町遺跡からは、縄文晩期の大墓域が検出されている。弘部野蘭生中ノ町遺跡は、縄文後期後葉から始まり、縄文晩期前葉を中心として滋賀里Ⅲa式までの遺構・遺物があるが、弘部野蘭生中芝原遺跡は縄文晩期中葉の篠原式期の土器棺墓や土塚墓が検出されており、弘部野蘭生薦池遺跡は縄文晩期後葉の突帯文期の土器棺などが検出されている。途中滋賀里Ⅳ式期の痕跡が欠落し、また弘部野蘭生中芝原遺跡と弘部野蘭生中ノ町遺跡で若干の重複はするものの、調査担当者はこの事象を「同一集団内での集落、墓域の移動とみることもできる。」としている(文献12)。

そのほかには、山本遺跡(9)や弘部野南海道遺跡(13)、上弘部遺跡(14)で縄文時代の遺物が出土しているというが、詳細は不明である。また弥生前期後半の土器が弘部野蘭生薦池遺跡で出土している。

### 2 C地区：石田川下流域(14~21：心妙寺遺跡・弘川B遺跡・弘川A遺跡・弘川下野遺跡・弘川友定遺跡・弘川武末遺跡・大供遺跡・酒波東遺跡)

8遺跡のうちのほとんどが下位段丘または低位段丘に立地しており、2遺跡が氾濫平野に立地している。活動痕跡の初源は、心妙寺遺跡(15)・弘川A遺跡(17)・弘川武末遺跡(20)でみられる縄文早期中葉の押型文土器である。その後は、弘川B遺跡(16)の自然流路の埋土からまとまって出土した縄文中期後葉の遺物まで、痕跡が確認できない。また縄文後・晩期の明確な遺構としては、弘川B遺跡の突帯文期の土器棺墓がみられるのみである。弘川B遺跡からはこのほかに黒曜石チップが出土している。弥生前期後半の痕跡が大供遺跡(21)でみられるが、弘川下野遺跡(18)・弘川友定遺跡(19)は詳細が不明である。

### 3地区：安曇川下流域(22~26：稻荷山山頂・下平遺跡・犬馬場遺跡・堀川遺跡・針江浜遺跡)

当地区は新旭町に位置する5遺跡からなるが、立地についてこれら5遺跡間に共通点は見出せず、かつ時期を確定できる良好な資料にめぐまれていない。針江浜遺跡(26)では、弥生前期後半の土器とともに独鈷石が出土している。田井中洋介氏によると、その形態的特徴は従来の分類では縄文晩期前葉のものであり、共伴した遺物の年代である弥生前期後半との矛盾が生じるとしている(文献22)。下平遺跡(23)と犬馬場遺跡(24)では石鏃や剥片が出土しているが、とくに下平遺跡から発見された黒曜石製の石鏃が注目される。稻荷山山頂(22)と堀川遺跡(25)からは、石錘が出土している。

### 4地区：鴨川下流域(27~30南市場遺跡・中ノ坊遺跡・鴨遺跡・大溝湖底遺跡)

本地区は安曇川町・高島町に位置する4遺跡からなる。これらの遺跡には3地区と同様に立地地形に共通点はなく、また詳細を知りうる良好な資料が少ない。活動痕跡の初源は、鴨遺跡(29)から出土している縄文早期中葉の押型文土器である。鴨遺跡からはそれ以外に、縄文後期前葉の中津式から北白川上層式期にかけての遺物が出土している。また大溝湖底遺跡(30)から、縄文晩期の土器とともに弥生前期の遺物が出土している。このほか南市東遺跡(27)・中ノ坊遺跡(28)からはそれぞれ土器片・石匙が出土しているのみで、詳細は不明である。また鴨遺跡からは弥生前期前半の土器が出土している。

## B. 事象の変化

以上のように、湖西南部地域の縄文遺跡は、遺跡数も湖東・湖南地域と比較して少なく、またその資料内容も乏しい遺跡がほとんどである。もちろん、これらが高島地域の縄文遺跡の全てではないであろう。しかし縄文遺跡の発見が少ないことは、実際に縄文人の活動痕跡が少ないことを意味していることが第一に考えられ、そういった「遺跡の少ない地域」は、それはそれで評価すべきであろう。だが各地域の開発速度の差違が発掘調査量の差を生み、それがこういった結果を生み出していることが、その第一の理由として考えられる。

しかしながら筆者はこの「湖西北部地域における縄文遺跡の過少性」について、各河川の土砂堆積量が大きく影響していると考えており、これを第二の

理由としてあげたい。比較的土砂堆積の少ない知内川・石田川流域での縄文遺跡は当地域全体の4分の3をしめており、土砂堆積の激しいその他の3つの主要河川流域での発見例はそれより少ないのである。この3つの主要河川による多量の土砂堆積によって、①縄文遺跡の形成が阻害された、②形成された縄文遺跡が後に覆われる、もしくは破壊されたため、発見が困難になっている、という2つのパターンが考えられよう。またこの過少性の第三の理由として、饗庭野・泰山寺野の洪積台地で縄文遺物が発見されていないこともあげられよう。現在国有地となり自衛隊の演習場となっているため、饗庭野には今後も調査のメスが入ることはないだろうが、縄文遺跡の立地条件としては申し分ないのではないかと思われる。

続いて、湖西北部地域における各地区の内容と消長について整理したこれらの成果をもとに、当地域における事象の変化について再整理を行いたい。

前段階として、旧石器・草創期の様相について述べておきたい。旧石器が1点、2A地区で出土しているが、有舌尖頭器は発見されていない。以下段階を設定し、事象面の整理を行う。

第1段階 縄文早期中葉を画期とする。2C地区・4地区で活動痕跡が顕在化する。下位段丘と氾濫平野に痕跡がみられる。一部で遺構が検出されている以外（心妙寺遺跡）は、居住施設および祭祀装置、ならびに希少搬入品の存在は確認できない。

第2段階 縄文中期前葉を画期とする。1地区でのみ、氾濫平野および扇状地において活動痕跡が確認される。しかしこれらに伴う居住施設および祭祀装置、ならびに希少搬入品の存在は確認できない。

第3段階 縄文後期前葉を画期とする。それまでに活動痕跡が確認された1地区・2C地区・4地区で縄文中期後葉ないし後期前葉の活動痕跡が再びみられる。さらに2A地区・2B地区では、縄文後期中葉ないし後葉の活動痕跡が確認されるようになり、2C地区から上流の下位段丘などに、拡散していく傾向が読み取れる。このように、後期に入ると湖西北部地域の各地区で活動痕跡が確認されるようになる。

祭祀装置としては1地区で縄文後期前葉の土偶が

確認されている。また1地区では縄文後期前葉に関東系土器の搬入がみられる。しかし当該階は土坑・柱穴などは確認されているものの、竪穴住居跡の検出例は報告されておらず、明確な居住施設の存在は確認できない。

第4段階 縄文晩期前葉を画期とする。2A地区・2B地区・2C地区で引き続き活動痕跡が確認されるが、そのほかの地区では明確な痕跡を確認できなくなる。居住施設の存在はやはり確認できないが、該期に著しく増加するものとして、土器棺墓および土壙墓の埋葬施設がある。2A地区・2B地区・2C地区の各地区でその存在が確認されるが、特に前二者には北仰西海道遺跡(8)および弘部野遺跡群(10~12)という大墓域が、縄文晩期を通じて形成されている。また2B地区では、縄文晩期中葉の配石遺構3基も検出されており、祭祀装置の大きな顕在化が指摘できる。

このほかにも祭祀装置としては、2A地区で縄文晩期中葉の土偶や石棒・石冠などがみられ、さらに詳細な時期は不明であるが、1地区・3地区で独鈷石が確認されている。また希少搬入品として、2A地区ではヒスイの管玉がみられる。さらに2A地区・2B地区では、縄文晩期前葉に東北・北陸系土器の搬入がみられる。

弥生前期前半の痕跡が、3地区・4地区で確認されているが、いずれも土器の破片資料のみが確認されているだけである。さらに、縄文晩期後葉の土器と弥生前期前半の土器の確実な共伴例もない。

第5段階 弥生前期後半を画期とする。2A地区・2B地区・2C地区で該期の土器の検出例がある。そのうちの一部には、縄文晩期後葉の土器との共伴例が報告されているが、共時性については不明である。居住施設・祭祀装置・希少品などは確認されておらず、検出された遺構にしても、2B地区で土坑が発見された程度である。

#### 4. 展開過程に関する解釈

以上、湖西北部地域における事象の整理を行った。これらを踏まえた上で、各段階についての解釈を行い、その要因について以下に考えを示していく。

黎明期 湖西北部地域における黎明期は、丘陵地



一帯で活動していた。

**第1段階** 縄文早期中葉に至り、下位段丘および氾濫平野においての活動を開始する。

該期の痕跡が確認された各遺跡は、湖岸から約2km以内に立地する。従来の湖東地域および湖南地域における検討では、この範囲を「湖岸近接地」として理解し、該期の活動痕跡の形成を湖岸の豊饒性に起因すると考えてきた。しかしながら当地域は痕跡がみられる地形からそのような要因は導きにくいと考える。筆者は、石田川流域が若狭へと通じるルートとなっており、2C地区が湖上の交通ルートと石田川沿いのルートの交点であることに注目したい。同様に4地区は、湖西南部地域へ向かうのに必ず通過しなければならない交通の要衝であることが指摘できる。

**第2段階** 縄文中期前葉に至り、扇状地にも活動の範囲を広げる。

2地区では知内川および百瀬川が形成した扇状地上に該期の痕跡が確認できる。そこは湖上ルートから越前方面へと抜ける交通の要衝であり、その重要性が要因となったと考えられる。

**第3段階** 縄文後期前葉に至り、各地区において活動範囲を広げる。祭祀装置や搬入土器を所有する地区が出現する。

特に地形は関係なく、各地区において活動が活発化する。とくに石田川流域においてそれが顕著に現れているが、祭祀装置および搬入土器は1地区においてのみ確認ができる。その点については、知内川ルートの石田川ルートに対する優位性が考えられるかもしれない。

**第4段階** 縄文晩期前葉に至り、活動の範囲が石田川流域に縮小する。祭祀装置や希少品・搬入土器を所有する地区が引き続き存在する。

縄文晩期においては、石田川流域にのみ痕跡が集約する。特に2A地区・2B地区に祭祀装置・希少品および搬入土器が確認される。これらの地区では、湖西北部地域の該期を特徴付ける大墓域が形成されている一方で、居住施設の確認はされていない。縄文晩期後葉に遺跡が増加するという現象は当地域では確認できず、低湿

地における水田農耕に起因するという該期の従来の要因は導きにくいと考える。

**第5段階** 弥生前期後半に至り、第4段階と同様に石田川流域で、土器片の出土という現象でのみその痕跡がとらえられる。

弥生前期前半の痕跡がみられた地区にもその痕跡がみられなくなり、石田川流域でのみ確認できる。現在でも穀倉地帯である石田川流域において、該期に水田農耕が定着したと考えられよう。

## 5. まとめ

以上、とくに各地域が持つ「ルートの交点」という特徴を中心に、各段階の背景となる要因を考察してみたが、実際のところなんら積極的な要因は導き出せないでいる。それはおもに資料数の少なさに起因するところが大きい。とくに立地する地形ごとに地区構成を行うという従来の手法が取れない以上、各地区は空間的なまとまりでのみくられるため、共通する性格がとらえられない。このほかに、黒曜石という希少価値をもつ搬入品が2C地区・3地区で確認されているものの、出土状況が不明瞭であることから、有効な検討材料として使えないのは残念なことである。

本稿では、各遺跡の事実関係の集成と把握、及びそれをもととした湖西北部地域における縄文遺跡の展開の経緯をこれまで探ってきた。現状で確認される、当地域における縄文遺跡の概要を述べることはできたが、検討対象となる事例の少なさから、不明瞭な部分が多いことは否定できない。したがって現状での積極的な評価は避け、今後の事例の増加をまわって検討を進めることが懸命であろう。

文末ながら、本稿のもととなった発表をおこなった例会の席上で、多くのご教示を下さった近江貝塚研究会会員各氏に感謝する次第です。

## 註

(1) 早期以降の時期区分に関しては、以下の時期区分を用いた。

早期 前葉：ネガティブ押型文 中葉：通常の押型文 後

葉：糸痕文

前期 前葉：羽高下層Ⅰ式 中葉：羽高下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式 後葉：北白川下層Ⅱb式～大歳山式

中期 前葉：鷹島式・船元Ⅰ式 中葉：船元Ⅱ・Ⅲ式 後葉：船元Ⅳ式～北白川Ⅲ式

後期 前葉：中津式～北白川上層Ⅱ期 中葉：北白川上層Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式 後葉：元住吉山Ⅱ式・宮滝式

晩期 前葉：滋賀里Ⅰ・Ⅱ式 中葉：滋賀里Ⅲa式・篠原式 後葉：突帯文

(2) 河川の特徴に関しては、以下の文献に主によっている。

滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房 1984

平凡社地方資料センター『日本歴史地名体系第25巻 滋賀県の地名』平凡社 1991

## 引用文献一覧

各遺跡の内容については、以下の各文献によっており、この番号は表1の文献番号と一致する。

1. 兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅵ-3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979
2. 兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-1 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980
3. 兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981
4. 兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ⅩⅠ-2 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1984
5. 神谷友和ほか「高田館遺跡」『一般国道161号（湖北バイパス）建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1991
6. 葛野泰樹ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-4 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980
7. 葛原秀雄『今津町文化財報告書』第2集 今津町教育委員会 1983
8. 葛原秀雄『今津町文化財報告書』第3集 今津町教育委員会 1984
9. 葛原秀雄・江南久美子『今津町文化財報告書』第4集 今津町教育委員会 1985
10. 葛原秀雄ほか『今津町文化財報告書』第5集 今津町教育委員会 1986
11. 葛原秀雄ほか『今津町文化財報告書』第7集 今津町教育委員会 1987
12. 葛原秀雄ほか「弘部野遺跡発掘調査概要報告書」『今津町文化財報告書』第8集 今津町教育委員会 1988
13. 葛原秀雄ほか「今津町内遺跡発掘調査概要報告書」今津町教育委員会 1989
14. 葛原秀雄『日置前遺跡発掘調査概要報告書』＝玉塚地区の調査＝ 今津町教育委員会 1995
15. 葛原秀雄「弘川下野遺跡発掘調査概要報告書」今津町教育委員会 1995
16. 葛原秀雄「原始社会の今津町」『今津町史第1巻』今津町史編さん委員会 1995
17. 小椋安子「高島郡の縄文時代」『滋賀県文化財調査報告書第5冊 高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』滋賀県教育委員会 1975
18. 近藤 滋『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ（本文編） 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1978
19. 滋賀県教育委員会『平成2年度 滋賀県埋蔵文化財調査年報』1992
20. 滋賀県教育委員会『平成6年度 滋賀県埋蔵文化財調査年報』1996
21. 滋賀県教育委員会『平成7年度 滋賀県遺跡地図』1996
22. 田井中洋介「弥生社会からみた独钻石」『紀要』第10号 滋賀県文化財保護協会 1997
23. 高島町教育委員会ほか『鴨遺跡』1980
24. 田中勝弘「弘川遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979
25. 中江 彰「南市東遺跡発掘調査概報」『安曇川町文化財調査報告書』2 安曇川町教育委員会 1980
26. マキノ町誌編さん委員会『マキノ町誌』1987
27. 丸山竜平ほか「弘部野」『今津町文化財報告書』第1集 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会・今津町教育委員会 1982
28. 三宅 弘「19. 大溝漁港航路液渾 大溝湖底遺跡」『文化財調査出土遺物雁収納保管業務 昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1989

## 編集後記

今回は、縄文時代から中世までの論考、および歴史学そのものに関する問いかけを掲載しました。——時は世紀末、新たな一世紀を我々はもうすぐ迎えようとしています。未来と現在を真剣に考え、そのために過去のデータを蓄積していく。それが文化財保護・考古学に携わる我々の責務の一つだと思われます。本号がその一助になるのを願ってやみません。(S)

平成11年3月

### 紀要 第12号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大苅町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668